



浅間山北麓ジオパーク通信

あさまびと

A S A M A - B I T O

2024
秋号

Vol.30



地域の成り立ちから、地球の成り立ちを知る

SDGs × ASAMA

特集：浅間山北麓の歴史③～近世～



今井分教場生徒（明治末頃）

浅間山北麓の歴史を3回に分けて紐解くシリーズの最後、近世です。大政奉還により、政権が武士から天皇に移管され、国の体制が大きく変わり、近代国家へと変貌していく激動の時代です。その激流の中で、この地では何が起きていたのか見てみましょう。



▲小串鉱山全景 (S35)



▲昭和12年の地滑り大災害の後片付けを行っている様子 (AIカラー化)

一大産業を築いた、 硫黄鉱山

孺恋周辺の西吾妻地域にとって、かつて硫黄は特産物でした。特に本白根山周辺には、豊かな硫黄の鉱床が数多く存在しました。小串、吾妻、石津、白根などの鉱山で製煉された硫黄の塊を鉄索で草軽電気鉄道などの駅に運び、信越線経由で工場地帯へ送っていました。

この地域の硫黄の歴史は古く戦国時代からで、江戸時代には地域の名主クラスの者が硫黄に携わり、幕末期になると鉄砲の黒色火薬の原料として使われたり、生糸と共に輸出品になったりしました。横浜開港の立て役者である孺恋三原出身中居屋重兵衛も硫黄に関わり、火薬製造の書「砲薬新書」を表わしています。

明治以降硫黄の需要増加に伴って近代工業化した企業の採掘が行われるようになりますが、日華事変並びに第二次世界大戦中になると硫黄鉱山整備令などが公布され、硫黄の需要は減少の一途を辿りました。

戦後になると硫黄を使用する化繊、パルプ工業などに急激な復興があり、硫黄の需要が高まり、また、「黄色いダイヤ」の名で、朝鮮戦争や特需景気により硫黄鉱山のブームが巻き起こりました。鉱山に学校や映画館も建てられ、数千人の街が形成され賑わい、日本経済の復興に大きく貢献しました。しかし、石油公害問題から昭和40年頃になると石化燃料の回収硫黄が生産され増産化され、それにより壊滅的な打撃を受け硫黄鉱山は、昭和46年までに閉山になりました。

現在につながる 郵便制度の誕生

現在の郵便制度は明治4年に東京～大阪間で開始されたのを起源としています。

当時水陸の交通運輸と通信をつかさどる役所のトップであった前島密（まえじまひそか）は、毎年政府文書の送達に1500両も支出していることに着目し、郵便は事業化できると判断し、今日の「全国均一料金」による日本の郵便制度を作り上げました。

孺恋村に郵便局（当時は郵便取扱所）ができたのは、翌年の明治5年大前村にでき、その後明治13年に三原と大笹にできました。当初の郵便は飛脚によって届けられていましたが、その料金は孺恋から高崎までで、およそ数千円もかかるようなものでした。

その後明治6年には全国均一料金制度が導入され、飛脚はどんどん衰退していきましたが、逆に郵便制度は成功し、明治6年には、為替や郵便貯金といった現在も残る制度が導入され現在に至るまで、隆盛していきました。



▲孺恋村旧三原郵便局局長集合写真

激動の時代に残る 戦争の記憶



200年以上続いた鎖国の時代から、明治に入り、世界から孤立していた日本は、富国強兵をスローガンに近代国家を目指し、植民地獲得競争の荒波の中に飛び込んでいきます。明治27年には朝鮮半島を巡る清との戦い、明治37年には満州と朝鮮半島を巡るロシアとの戦いに臨みます。両戦争に勝利した日本は、世界列強に仲間入りした半面、欧米諸国から警戒される存在となりました。

大正時代に入ると世界は更に混乱を極め、大正3年にはヨーロッパで第1次世界大戦が始まります。連合国側についた日本は、ドイツ領の獲得を巡って南洋へと進出し、大正7年大戦終結後も朝鮮半島、中国大陸、東南アジア、南洋諸島への覇権争いに邁進し、遂に昭和16年欧米諸国との対立が頂点に達し、大東亜戦争に突入します。緒戦の目覚ましい戦果は長続きせず、日米の潜在的国力の差が顕在化し徐々に戦線は押し戻されていきます。本土決戦の最後の砦として長野市松代町に皇居や政府機関を移転する準備が進められ、浅間山北麓には、朝霞にあった陸軍予科士官学校が移設され、陸軍の長距離射程砲の演習場、海軍が開発中の無線誘導型地对空ミサイル奮龍2型の試射場等が設けられましたが、その成果を発揮できぬまま終戦を迎えることとなりました。

長きに渡る反対運動を経て 令和2年に完成したハッ場ダム

昭和22年9月に「カスリーン台風」という戦後最大規模の台風が関東地方を襲いました。この台風による大雨で、利根川が決壊したことなどにより、死者約1100人、家屋浸水約30万戸という大変大きな被害が出ました。さらに首都圏では昭和33年から毎年のように渇水があり、昭和39年には昼間にも断水を実施するなど大変厳しい給水制限が行われました。このような問題を解決するひとつとして、ハッ場ダム建設計画が立てられました。昭和27年にハッ場ダムの建設計画が発表されてから令和2年の完成まで、68年もの年月がかかりました。長い時間がかかった主な理由は、国の一方的な進め方への反対運動や、水没による移転や生活再建のための話し合いに時間がかかったためです。

ハッ場ダムには4つの役割があります。防災操作（下流域の洪水被害を軽減）、流水の正常な機能の維持（本来河川が持っている機能を正常に維持）、新規都市用水の供給（群馬県及び下流都県へ、水道水と工業用水を供給）、発電です。ハッ場ダムではダム堤体を自由に見学ができ、「なるほど!やんば資料館」では建設工程や仕組みを学べます。また、バンジージャンプや水陸両用バス、自転車型トロッコ、カヌー、カヤックなどのアクティビティも充実しており、新しいスポットとして注目されています。



▲現在のハッ場ダム

（写真：利根川ダム統合管理事務所提供）

(一社)つなぐカンパニーながのはら事務局

ウッド みゆき氏

他界した祖父は若い頃草軽電鉄小代駅の傍に住んでおり祖母は北軽井沢駅から電車でお嫁に来たそうです。祖父は周囲の様子を絵や文章で残しており、その一部を紹介します。

『草軽電車の思い出』 応桑 山本秀山

(前略)...

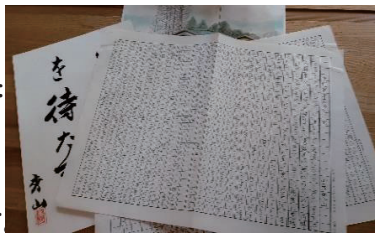
私共は当時、外に交通機関が無かったので何時もこの電車で東京方面へ行く時、軽井沢へ出て信越線に乗り換えて行ったものです。帰りは上野を終列車に乗り軽井沢へ早朝真暗の駅の中で一番列車を待った思い出があります。

子供の頃よく線路で遊びました。レールを渡り、夏になれば蜻蛉とり「おにやんま」私達はこれを「ふじまき」と呼んで道路や線路脇の水が流れている所で草や木の枝を持って待ち構えて捕りました。線路脇を道路代わりによく歩きました。危険な事と思ふでしょうが、草軽電車はカーブが多く上りになれば速度が遅く、遠方より独特の音が聞こえ、これはレールと車輪のフランジが摩擦するものだそうです。それが電車が近づくと大きく揺れてくるので事故などは一度もありませんでした。(中略)...

吾妻鉱山から出荷される硫黄はスキー場のリフトのようなものにより芦生田の今の安済酒店の前だと思えますがここで草軽鉄道へ積換へる等、其の活気は大したもので良く友達と見に行きました。(中略)...

地元住民の存続の願いもむなく其の姿を消し五十年近く走り続けた草軽電車も其の幕を閉じ限りない愛惜の心を捧げます。

祖父は小代駅の傍にあった熊本院(後に現在の場所に移動)という山寺の住職でしたが、新しいことに挑戦したり、マメに作品を残したりする多趣味で器用な人でした。まだ元気で暮らしていればもっといろいろな話を聞いてみたかったです



群馬県立嬭恋高等学校 教諭

島田 翔太氏

近現代嬭恋村における吾妻線と浅間山

吾妻線はJR上越線渋川駅から分岐し、吾妻郡内をほぼ東西に走って嬭恋村の大前駅に至る全長55.6kmのJR線で、全線単線の電化路線。第二次世界大戦中、六合村で鉄鉱山(群馬鉄山)が発見され、その鉄鉱石運搬のため渋川-太子間の建設が急がれ、1945年1月2日、渋川-長野原間(42.3km)が国有鉄道長野原線として開通。長野原-六合村太子間(5.8km)は日本鋼管の鉱山専用線として開通した(1952年10月に国有化)。開業当初は貨物営業だけだったが、1946年4月20日に渋川-長野原間、1954年10月1日に長野原-太子間の旅客営業を開始。鉱脈の枯渇や安価な輸入鉄鉱石が台頭したことなどから、群馬鉄山は1965年に操業を停止した。鉄鉱石輸送の使命を終え、旅客も激減していた長野原-太子間は1970年11月1日に営業を休止、1971年5月1日に廃止した。その後、四万温泉や草津などへの観光路線としての性格を強めた長野原線は1967年7月1日、上野からの急行電車の直通を目的として電化された。1971年3月7日に長野原-大前間(13.3km)が電化し、線名は吾妻線となった。さらに、鉄道敷設法別表54号ノ三「群馬県嬭恋ヨリ長野県豊野ニ至ル鉄道」が挙げられ、現在の長野市まで通ずる鉄道が計画されていたが実現に至らなかった。その背景には、当時の国会答弁の議事録によれば、活火山である浅間山の存在が大きく関係しているように思われる。

(右の写真は1971年3月7日、吾妻線長野原~大前間開業時の万座・鹿沢口駅の様子 / 『歩きつかれて 平田一夫(1993)』より)



アンケートに答えると毎号5名様にハンドブック(非売品)が当たる!



秋のジオパーク関連イベントのお知らせ!

7月19日から翌年5月6日	嬭恋村の昭和9年 企画展
10月13日	鎌原観音堂周辺マルシェ
10月20日	ジオパークde登山 第4弾
10月19日~21日	ジオパーク 再認定審査

発行: 浅間山ジオパーク推進協議会

Mt. Asama Geopark Promotion Council

制作担当: 広報・観光委員会

〒377-1524 群馬県吾妻郡嬭恋村大字鎌原494-45

TEL/FAX: 0279-82-5566

URL: www.mtasama.com

E-mail: info@mtasama.com

Facebook: www.facebook.com/asamageopark

Twitter: https://twitter.com/home

ガイドの受付しています

「浅間山北麓ジオパークガイドの会」の認定ガイドによる案内の受付をしております。ご希望の方は、左記、推進協議会事務局までお申し込みください。

[料金] *ガイド1名あたりの値段

平地: 半日6,600円 1日13,200円 (参加者11名以上ガイド2名)

軽登山: 半日11,000円 1日16,500円 (参加者8名以上ガイド2名)

登山: 1日27,500円 (参加者8名以上ガイド2名)

編集後記

今号は近世の歴史をとりあげました。そこまで昔ではなくても人の記憶から失われてしまうものはたくさんあります。祭りなどの文化や学校など、過去に生きていた人の記憶や日常を未来に残すのもジオパークの大切な役割の1つです。